

遠州灘の 高潮災害と二つの築山

つき やま
いのち やま
— 命山の築造とその周辺 —



静岡県 袋井市歴史文化館

新田開発の始まり

浅羽・横須賀の海岸低地には、約6000年前に起こった縄文海進の、なごりの潟湖（ラグーン）が低地の奥深くまで入り込み、そこへ原野谷川、三沢川、西大谷川などの中小河川が注ぎ込んでいました。

高低差の無い海岸低地を流れる原野谷川は大きく蛇行し、その流域では洪水被害がたびたび発生しました。

この湿地帯の開発は、戦国大名の今川氏によって16世紀中頃から手を付け始められます。永禄4年（1561）の今川氏真の書状には、「遠州所々新田の事」としてこの地域8ヶ所の地名が列記されています。

具体的な痕跡として、旧原野谷川流路の左岸に残る「古堤」はこのときの治水に関して築造されたと推定され、現在も富里地区で1.3km程が残っています。

浅羽低地を東西に走る中畦堤もこの頃補修され、湿地の悪水を吐かせるための排水路も掘られ運河として川船の往来を盛んにしました。

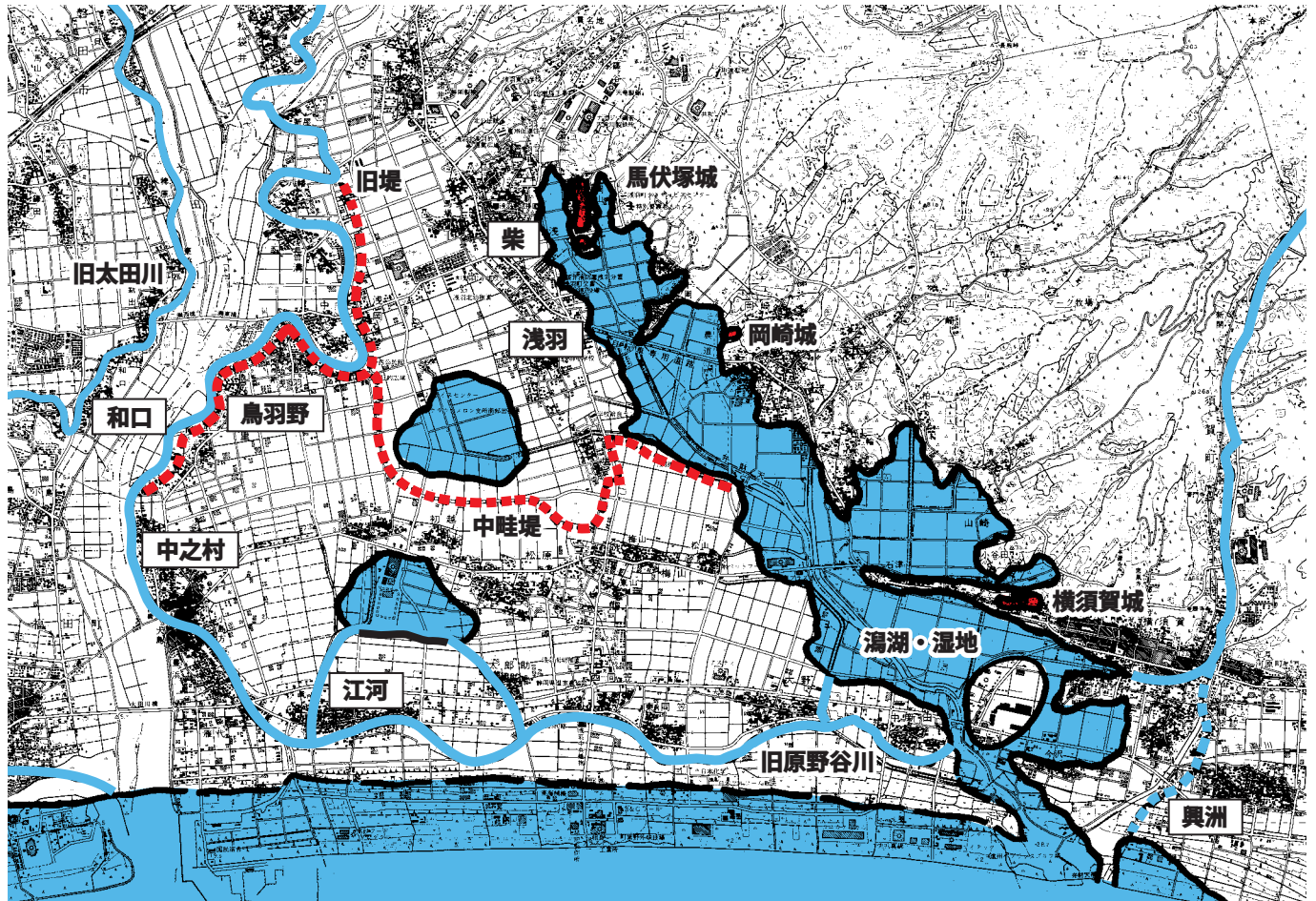
今川氏によるこのような開発は、河川の治水と、排水工事を基本としたもので、遠州で最も古い新田開発の事例といえます。



今川氏真判物 海老江文書（広島大学文学部国史学教室所蔵）

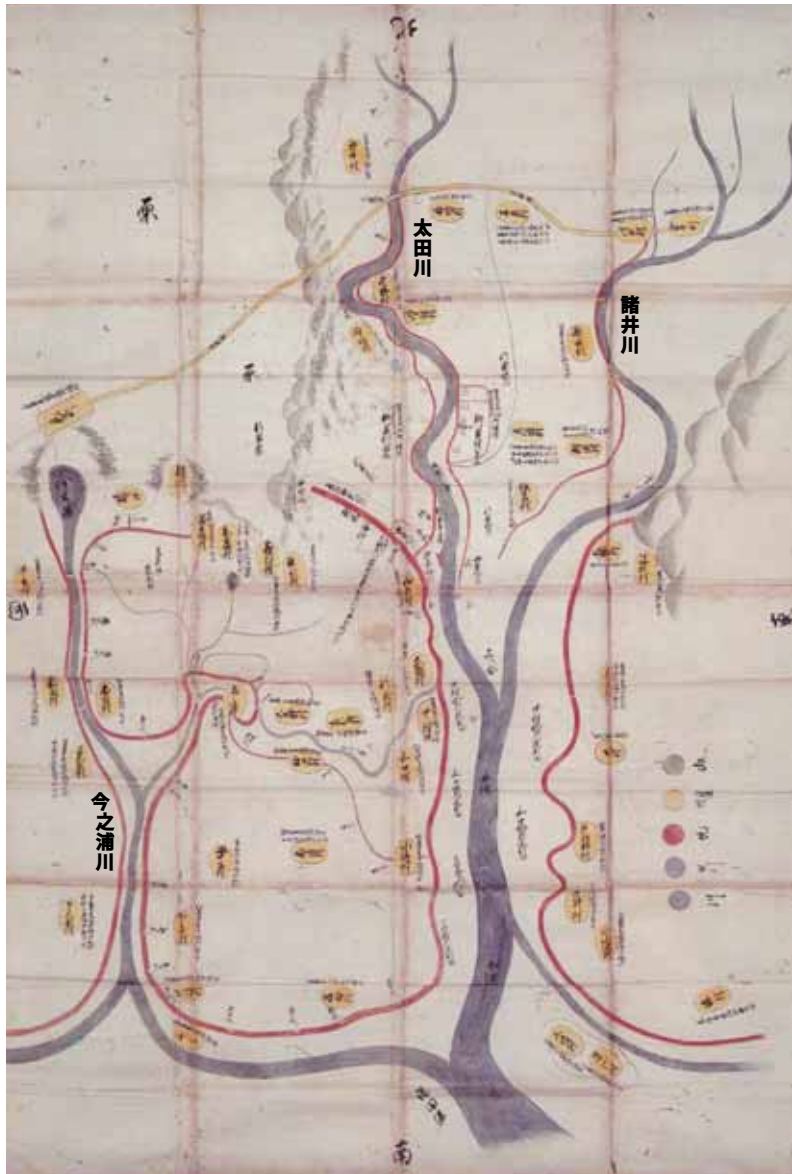
今川氏による新田開発を示す史料が2通残される。功績のあった海老江菊千代に宛てたもの。永禄3年（1560）7月20日付けと、翌年8月2日付けで、これは後者のもの。

ここに、新田として浅羽・柴・江川・和口・大淵・中之村・鳥羽野・興洲の名が挙げられ、悪水を吐き出すため湊を掘り通し、不作地がことごとく開発可能になったというもの。



戦国時代の浅羽・横須賀低地と新田開発の関係

戦国時代(16世紀後半頃)の浅羽・横須賀低地の地形を復元した。原野谷川と太田川は合流せず、原野谷川は大きく蛇行しながら海岸砂堤の内側に沿って東へと流れ、潟湖に注ぎ込んでいた。西大谷川も、後の横須賀城下の真中を西へと流れ潟湖に注ぎ込んでいる。潟湖の最も奥まったところには、今川家の重臣遠江小笠原氏の居館と城(馬伏塚城)が置かれ、流域の新田開発に深く関与していた。カッコの地名は永禄3年の判物に登場する新田の場所。ここで注意してほしいのは、潟湖の入口が非常にせまいということ。この地形が延宝8年(1680)閏8月の高潮災害の被害を大きくした。



▲今之浦川・太田川・諸井川（原野谷川）流域絵図 江戸時代
(磐田市教育委員会蔵)

原野谷川・太田川合流工事後の川筋と堤との関係を示す貴重な絵図。太田川と今之浦川の間も御厨大囲堤が囲む輪中であった。

浅羽一万石の誕生

原野谷川に沿って堤が設けられたものの、川が増水してたびたび押し切られ、浅羽じゅうに水が入り大きな被害をもたらしていました。

徳川家康が関ヶ原の戦いに勝利を治め、慶長8年（1603）江戸に幕府を開くと、翌年には村落と農民を支配する基盤を整えるための遠州総検地が始まり、これと同時に太田川と原野谷川を合流させ、新しく川筋を掘って流路を付け替える工事が行われました。

この時に排土を用いて新しい川筋に沿った堤が築き直され、浅羽大囲堤の原形は誕生したと考えられます。

工事には幕府の代官頭として遠江支配に関わっていた伊奈忠次があたりとされます。当時始まった土木普請はこれだけに留まらず、太田川の西側でも大囲堤が築かれ、さらに西へと続く堤が最終的には整えられ、海岸平野の新田開発は本格化しました。

これら一連の大普請工事は、忠次が持つ高い技術力と幕府の巨大権力が結び付くことにより実現し、「浅羽一万石」はその産物として誕生しました。



▲昭和30年頃の浅羽大囲堤（浅）



▲大囲堤の調査のようす

堤は、自然堤防の高まりを巧みに利用し、その上に細かく盛土を叩き締めながら積み上げている。

1680年の地形と景観復元

ここに2枚の絵図があります。1枚は貞享3年（1686）の「^{あさばのしょうみずとけつみづらふんきききょう}浅羽庄水除堤相論裁許状絵図」、もう1枚が1670年頃の「遠州横須賀惣絵図」で、共にこの周辺が高潮災害に見舞われる延宝3年（1680）前後の、地形と景観を詳細に描いています。

この2枚の絵図を左右につなぐと、今回取り上げた地域の全体像が復元できます。

裁許状絵図には太田川と諸井川（原野谷川）が合流し、その右隣に閉め切られて溜池となった旧原野谷川の姿、右端には深く入り込んだ入り江、浅羽の33カ村を一周廻る大囲堤が描かれています。

惣絵図には大きく内陸部に入り込んだ内海の姿が描かれ、横須賀城が直接内海に面していたこと、城下町のすぐ西側が内海だったことがわかります。

内海の入り口（現在の弁財天川）は砂洲が発達して狭い反面、内側は広がっていました。狭い入り口を乗り越えた津波は高さを増し、同心円を描いて広がります。

この地形的特徴が延宝3年の高潮災害の被害を大きくしました。



▲浅羽庄水除堤相論裁許状絵図 貞享3年（個人蔵）浅羽町指定文化財

浅羽低地の真中を東西に延びる中畦堤の高さをめぐって上輪と下輪の村々が争論をくりかえした。上の水田からの排水は下の水田に流れ込み、この悪水が数日溜まると稲が水腐れを起こし被害をもたらした。



▲遠州横須賀惣絵図 寛文年間（個人蔵）

この当時の横須賀城は南・西は内海、北は沼に囲まれた水の中の城だった。



▲『長溝村開発由緒書』（個人蔵）

西浅羽地区長溝の、開発由緒や災害記事が豊富に記されている。延宝8年の高潮災害の記事は、災害から80年後に書かれたものだが、実に詳細な内容が記され、被害のすさまじさが伝わる。（寛文八年庚申彼岸中日の翌日と記すが、これはまさに高潮のあった閏8月6日に相当するので、延宝八年の誤りである）

延宝8年閏8月6日の高潮災害

延宝8年（1680）閏8月6日には、江戸時代最大と言われる台風が襲い、中国地方から東海、関東、東北の広い範囲で大きな被害が生じました。

江戸では午前8時頃から10時にかけて最も風雨が激しくなり、3420軒が倒壊、本所深川では700余人が溺死しました。幕府の歴史書である、徳川実紀の『常憲院殿御実紀12巻』にも横須賀城下の被害記事が出ています。

浅羽・横須賀地域の詳細を記した記録には、『百姓伝記』『横須賀根元暦代明鑑』『長溝村開発由緒書』があり、詳細に知ることができます。『百姓伝記』によると「午前5時頃より風が吹き出し、午前10時頃には高潮が押し寄せ、多くの人馬が死亡、海はしけとなり、降る雨は海水のように塩辛く、打寄せる波は中一つが大きく、前後の波は小さかった。横須賀城惣曲輪前の中土居で波は止まった。

城の西側の村は潮浸しとなり、なかでも東同笠・大野新田・中新田・今沢新田には潮が強く当り、この村では老若男女300人が死亡した。掛塚まで高波があったが、城の東側の村々はさほどの高潮とはならなかった。」とあります。



▲『百姓伝記』（国立公文書館所蔵）

15巻よりなる。三河・遠江を舞台に、主として農業技術について述べたもの。著者および成立年代は明らかではないが、農書としては最も早く成立したものに属す。7巻防水集には「遠州横須賀湊普請物語」「国々津浪物語」が収められ、延宝8年の高潮災害の記事もある。



▲『常憲院殿御実記 十二』（国立公文書館所蔵）

徳川幕府編纂の歴史書である『徳川実紀』と呼ばれるもの。常憲院殿（五代將軍綱吉）御実紀の最後の閏8月16日の部分に「本多越前守利長が所領 遠州横須賀の地この六日暴風雨のために城の櫓一、土民の家六千余流れうせ溺死のもの三百余人のよし注進す」と記載されている。

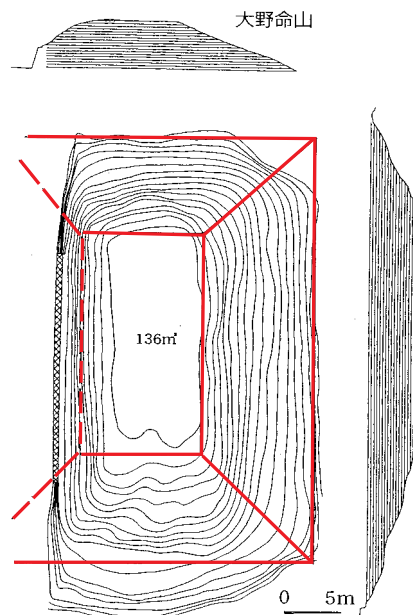
災害復旧と築山の築造

内海に入り込んだ高潮は、横須賀城の外側で9尺(約2.7m)に達し、浅羽では八艘(江之端)の水門が二つ打ち抜かれ、大田堤は1984間(約3.6km)が欠損し、このうち13ヵ所が大破しました。

このため浅羽一面に潮が入り込み、その高さは西浅羽の米丸村(浅岡)で5尺(約1.5m)にも達して浅羽一万石は泥の海となり、八千石が腐ってしまいました。

この当時の浅羽全域は横須賀藩領で、藩主は本多越前守利長でした。さっそく家中総動員で堤・塚の修復にあたります。『横須賀根元暦代明鑑』では「普請にあたっては領主から扶持米(賃金)もせず、農民たちは困窮を極め、追い討ちをかけるようにさらに8600俵の年貢増加を行った。払えない百姓はつかまえて女房は水田の中に矢来を組んで水中に漬け、男は寒中に水を掛けて凍えさせ、殺した村もあった」と記しています。「その後 中新田、大野、同笠辺の命塚は出来申候由」と避難所の築山(命山)が築かれたことも記されています。

藩主の利長は悪政を理由に出羽国山形へ5万石から1万石に減封された上で左遷されました。



現状と復元案



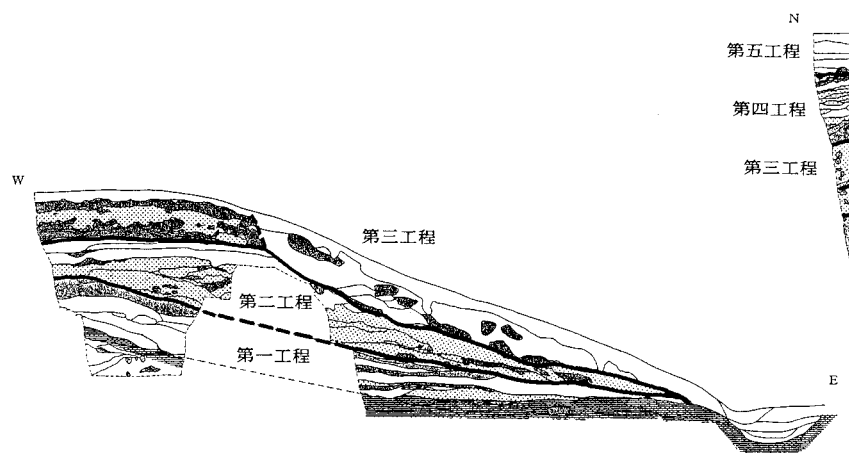
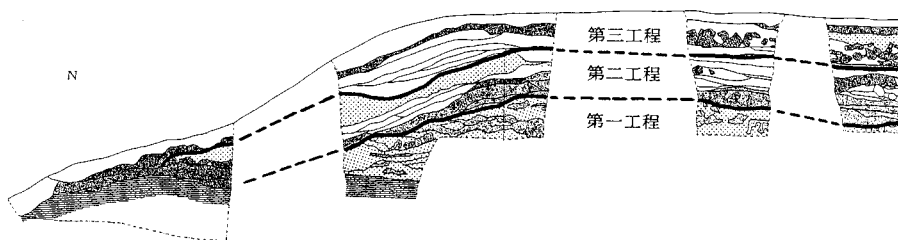
▲大野命山全景(南から) 浅羽町指定文化財



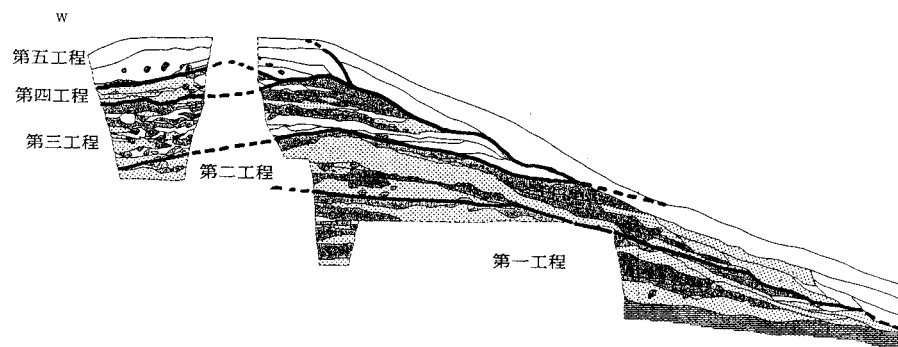
▲南北断面



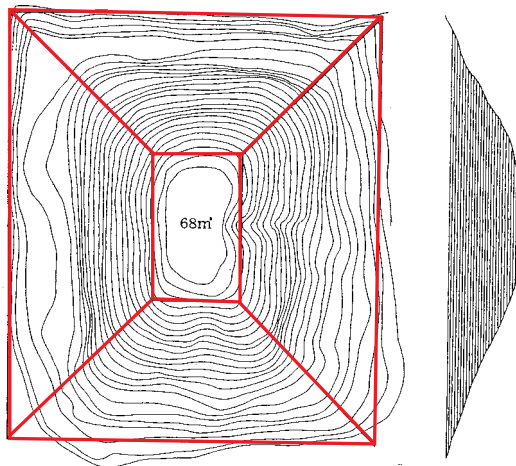
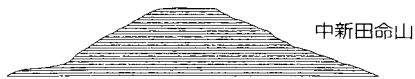
▲東西断面



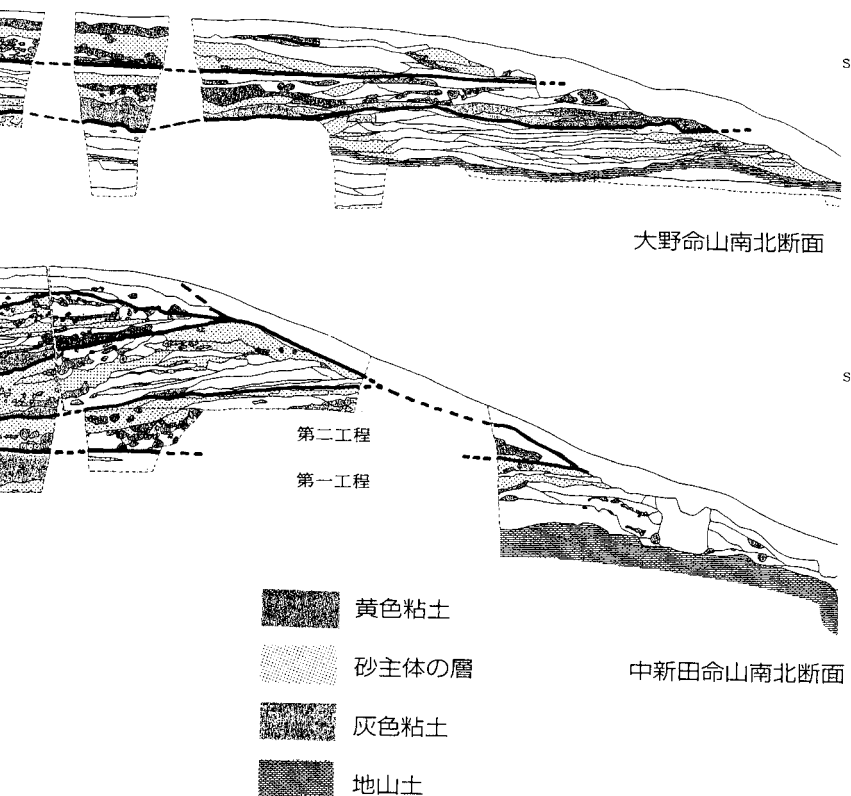
大野命山東西断面



中新田命山東西断面



現状と復元案



盛土・作業工程の比較

大野では地山の直上からほぼ1mづつ、3回の工程に分けて斜面を除きその土を水平方向に積み上げる。

中新田では地山の直上1mほどは水平方向に積んで土台を造るが、その上には中心部に向けて傾斜を持たせるように積み上げ断面が三角形状になっている。これを繰り返し、5回の工程で高さを確保している。

両者の違いは確保できた土の違いに起因しているようだ。大野は粘土が確保しやすかったのに対し中新田は砂地で、粘土の確保が容易ではなかったのだろう。

命山の復元と比較

伝承の域を出なかった命山の構造と、両者の関係を探るための学術調査を2002年10月～12月にかけて実施しました。

大野命山

規模・形態、南北32m、東西24m、高さ3.5mの長方形土量、約1500m³

頂上平場の面積、136m²

中新田命山

規模・形態、南北30.5m、東西27m、高さ5mの長方形土量、約2200m³

頂上平場の面積、68m²

特徴

隣同士の村で、ほぼ同時に築山を築き始めたのに、両者の形態は異なる。大野は頂上の面積を広くとる形態を採用し、中新田は高さを確保している。この違いはどこに起因するのだろうか。



▲中新田命山全景（南から）浅羽町指定文化財



▲南北断面



▲東西断面
命山の中心部の断面

村と命山の関わり

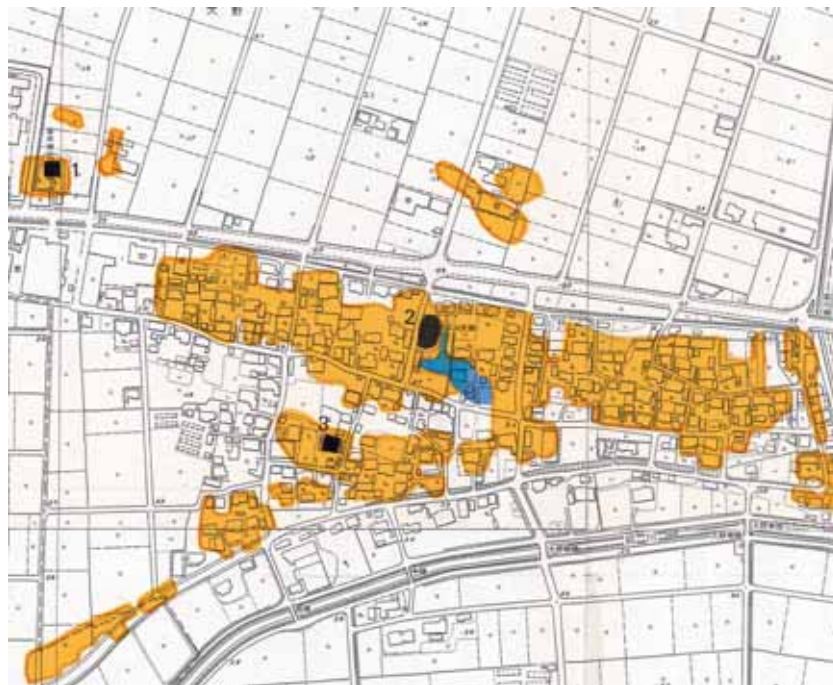
延宝の高潮災害の後に築かれた命山は村とどのように関わっていたのでしょうか。ここでは、村の鎮守と命山の位置に注目してみましょう。

大野・中新田は同笠に住む人が中心となって開いた村です。村を開くにあたり、鎮守として寄木大明神を同笠から分祀しました。このため三カ村ともに村の鎮守は寄木神社なのです。

大野は、江戸時代は同笠新田村と言い、中新田村は内海の縁に砂が堆積して砂洲となり、その中に新田を開いたことから中新田と呼ぶようになりました(『横須賀原始考』)。

両村ともに鎮守は、村からみて乾(北西)の方角で、しかも村外の微高地に位置しています。これは、地の神を祀るのと同じ場所で、村の鎮守が村全体の、地の神の役割を果たしていたとみることができます。

これに対し、避難所である命山は、集落の真中に来るように場所が定められました。このようなところに、計画的な村づくりの姿を伺うことができます。



▲同笠新田村(大野)の地形復元 命山の東南側の窪地(●)は土取りのためか。

1. 寄木神社 2. 命山 3. 大福寺(慶長4年創建)

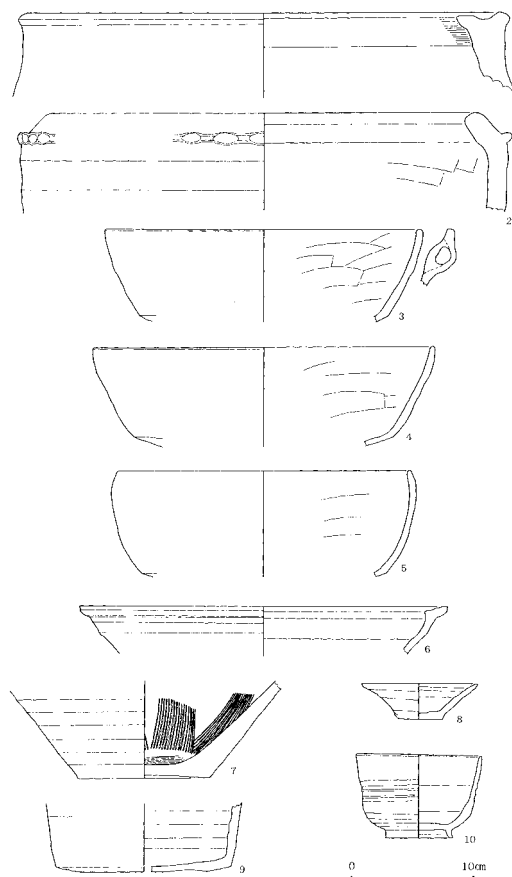


▲大野命山 内耳鍋出土状況



▲大野命山 内耳鍋出土状況

内耳鍋は2~3個体が割られ、炭と共に盛土の第1工程の上で同一面から出土する。単なる煮炊きの痕跡ではなく、湯立ての祭祀に伴う痕跡ではないかと推測した。



▲命山の出土遺物

1~8大野、9・10中新田

1 甕 2 火鉢 3~5内耳鍋 6・7掘鉢

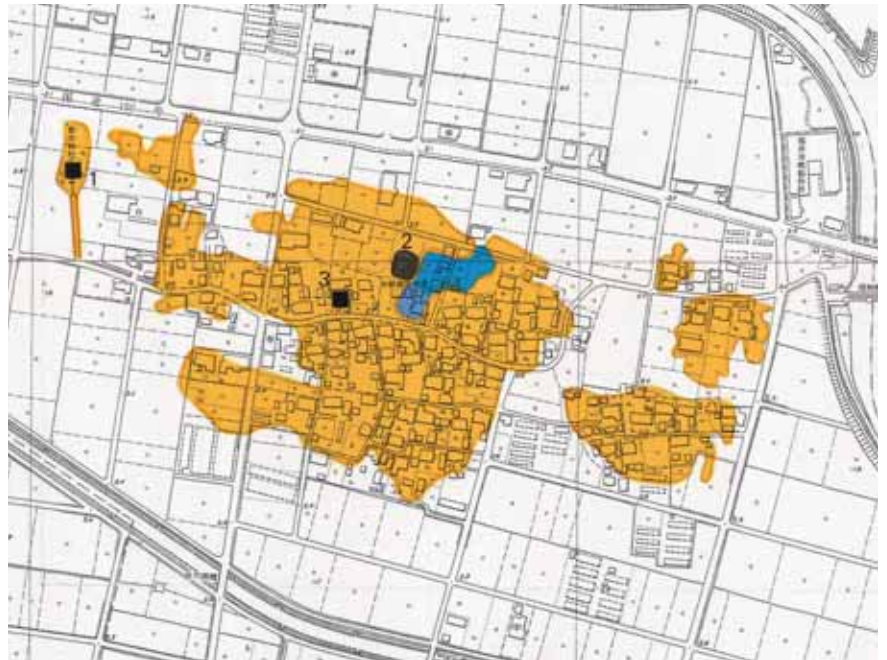
8 かわらけ 9 鉄釉片口 10 瀬戸産腰錆茶碗



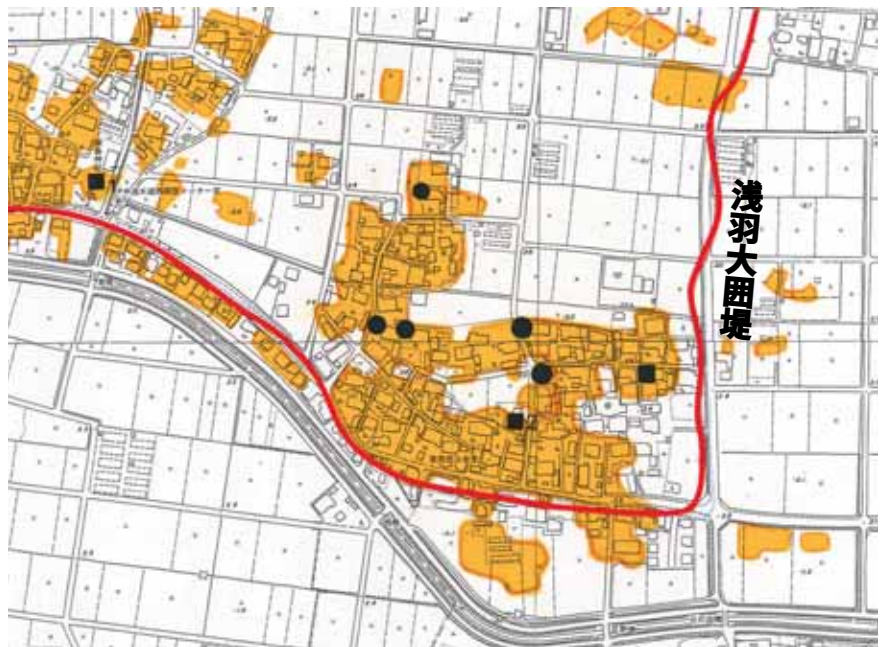
▲大野寄木神社の杜



▲中新田寄木神社の杜



▲中新田村の地形復元 命山の東側の窪み●は土取りのためか。
1. 寄木神社 2. 命山 3. 新造寺（元和元年創建）



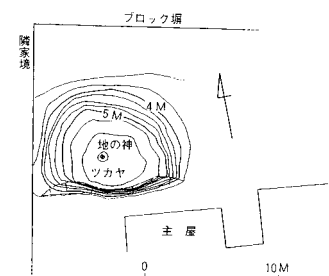
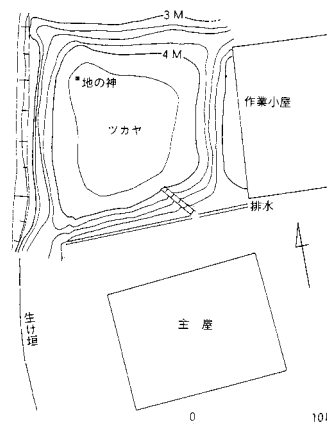
▲東同笠村の地形復元 かつては6〜7基の塚山(●印)が存在した
1. 寄木神社 2. 福泉寺（天正12年創建）

東同笠村の塚山（ツカヤ・ツカヤマ）

高潮災害の被害を受けた西同笠村にも、命山に類似する築山を見ることができる。ただし、ここに築かれたものは村全体の避難所ではなく、個人宅の乾（北西）の隅に位置している。

東同笠村は浅羽大囲堤に囲まれた浅羽輪中の村だが、村が所在する自然堤防は標高も低く（2mほど）、延宝の高潮災害で堤が切れ、中新田・大野と共に被害の激しかった村であった。その教訓から、個人宅（恐らく、一門の本家ではないか）に築山を築いたと考えられる。

『横須賀根元暦代明鑑』には「その後中新田、大野、同笠辺の命塚は出来申候由」と同笠にも命塚を築いたことが記されているが、それが現存するツカヤ・ツカヤマである。



▲東同笠村の塚山（阿部晋介宅）
◀東同笠村の塚山（朝比奈勝宅）

宝永四年（1707）の高潮災害で壊滅した村

〔湖西市白須賀 長谷元屋敷遺跡〕

東海道五十三次32番目の宿場、白須賀宿は遠州灘に臨む海岸砂地にありましたが、宝永4年（1707）10月4日に起こった大地震によって発生した高潮（大津波）の被害をうけ、隣接する長谷村とともにほぼ全滅しました。

この災害で宿場は流出家屋45軒、潰家51軒、半潰37軒、その他損害を多く出したといえます。被害の大きさに現地で復興することができず、翌年には汐見坂を登りきった台地の上に、白須賀宿とともに隣接する長谷村は移転します。

遺跡化した長谷村の一部は、国道1号線潮見バイパス建設と道の駅造成に先立って2度の発掘調査が行われ、16世紀から17世紀初頭にいたる半農半漁の村の跡が地中より姿をあらわしました。

この遺跡と似た立地条件を持つ同笠・大野・中新田など海辺の村の、延宝8年当時の景観や暮らしぶりを復元する手立てとして重要視しています。



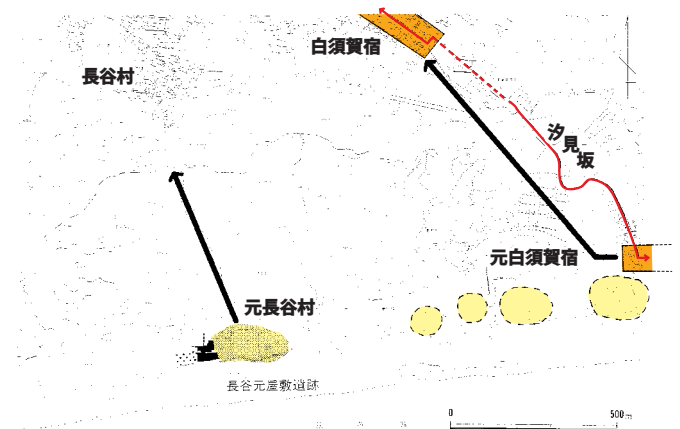
▲長谷元屋敷遺跡 発掘調査区全体図

2度の調査によって、高潮災害により被害を受けた村の姿が現れた。遺構はおおよそ16世紀代、17世紀代の2時期にわたることができる。



▲白須賀宿周辺の景観

海岸に面した集落は、ことごとく高台に移転した



▲海浜から高台への移転

宝永4年（1707）の高潮災害の翌年、海浜に所在した宿場と長谷村は高台に移転した。



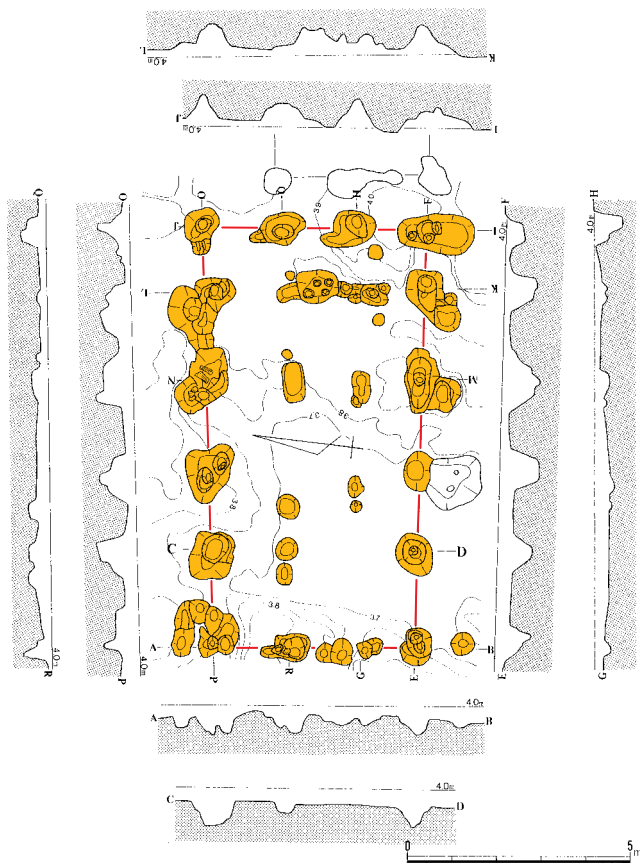
▲土層断面

断面途中の白く見える筋の上の砂層は宝永4年の高潮に伴う砂の堆積。このように集落全体を覆っている。



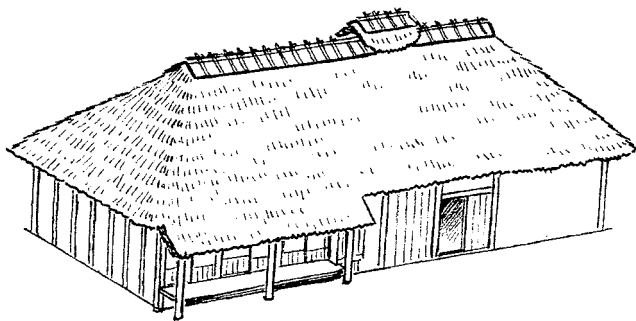
▲遺物集中地区

小貝塚に伴い、かわらけ、内耳鍋、小石が出土した。この周辺は日常の調理に伴う場所だったと考えられる。



▲17世紀後半の民家

遺跡から掘り出された東西5間(柱と柱の間)南北3間規模の建物。掘立柱の建物で、数度にわたって建て替えを行っている。床は土間で筵を敷き、間仕切りはゴザを使ったと考えられる。



▲直屋

すごや。土間と床部分を並べて一つの棟に納めた形、民家の基本形。



▲かわらけ

17世紀以降は灯明皿として使用されたものが増える。



左図の建物

18世紀までの一般農家の構造は、礎石を使わずに掘立柱建物が主流を占めていた。礎石を使う構造の民家は17世紀から普及し始めるが、村役人を務めるような一部の富裕層に限られていた。ほぼ全戸が石場(礎石)の上に建ち、板敷・畳敷部屋になるのは19世紀以降で、一般に理解されている江戸時代の農家のイメージはこの頃のもの。石場の上に柱を据えるには、本職の職人を必要とし、村の大工は急増した。



貝塚、遺物出土状況

貝塚の貝を除くと、日常生活で使った内耳鍋、かわらけ、茶碗などの器が小石とともに出土する。



内耳鍋・釜

17世紀までは、まだ鉄製の鍋・釜が普及しておらず、素焼きであった。吊り手が燃えないように内側に耳が付く。



▲瀬戸美濃産陶磁器

瀬戸美濃産の陶磁器はかなり普及しており、喫茶に用いられる天目茶碗も、たくさん出土する。

その後の高潮災害

その後の高潮災害のときには、「村の者共この山へ登り、一兩日居り、対岸の田町や大工町で食料を揃え、小舟で三番町西の田から漕いで運び助かった」『横須賀根元暦代明鑑』といえます。

これが、いつの高潮災害か明らかではありませんが、この頃は頻繁に高潮に見舞われており、生き残った村人が総出で築いた塚山は、何度も村人の命を救い、命塚・命山と呼ばれるようになりました。

元禄11年(1698)6月には太田川方面からの洪水によって被害を受け、8月には海からの高潮によって大囲堤は切れ、大きな被害がでました。寄木神社も流され、ご神体が行方不明になっています。翌12年8月にも高潮が発生し、堤が切れています。

宝永4年(1707)10月4日に起こった大地震によって、浜名湖から西の海岸では高潮が発生し、白須賀宿は壊滅的被害を受けます。

浅羽・横須賀周辺では、地震によって潟湖が隆起し内海の多くが干上がってしまいました。



▲「寄木神社のはじまり」 『スクラムエイトvol. 43秋涼号』
中遠地区広域市町村圏事務組合1998年より転載
中新田寄木神社『御由緒書』の内容にもとづき、作成された挿絵



◆中新田寄木神社『御由緒書』

元禄13年(1700)(中新田 永田清 氏所蔵)
中新田寄木神社のネンヤ(禰宜屋/神社の世話役を務める家)である永田家に伝わる寄木神社の御神体に関する不思議な物語を記した由緒書。

元禄12年8月15日の高潮で城飼・山名両郡海辺の潮除堤、川除堤が大破し、神社の御神体が流失したが、横須賀藩の役人牧野久森が翌年5月9日に見回りに来て、波打ち際で神々しい木像を見つけ、村の名主に話すと、それが流出した寄木神社の御神体だったという話。

元禄12年の高潮災害で、神社が流出したことや、寄木という名が、流れ着いた木像から付けられたことがわかる。その木像とは観世音菩薩だった。



◆宝永4年(1707)の地震のようすを伝える『長溝村開発由緒書』

(個人蔵)

江戸時代に起こった地震災害のうち、とくに遠州地方に大きな被害をもたらしたのがマグニチュード8.4と推定されている宝永4年10月4日に発生した地震だった。

これによって、内海は次第に隆起して横須賀湊は機能を果たせなくなった。浅羽でのようすが『長溝村開発由緒書』に詳細に記されている。

本展を開催するにあたり次の諸氏、機関の指導・ご協力をいただきました。

桑原武(大須賀町)、後藤建一(湖西市教育委員会)、国立公文書館、中遠地区広域市町村圏事務組合、磐田市文化財課、大須賀町教育委員会、湖西市教育委員会

特別展「遠州灘の高潮災害と二つの築山—命山の築造とその周辺—」

期 間 平成15年11月15日(土)～平成16年1月18日(日)

会 場 静岡県磐田郡浅羽町浅名1021 浅羽町郷土資料館2階展示室

編 集 郷土資料館学芸担当 山本義孝

※本書は、原書より表紙の文字を一部変更し増刷したものである。